



今月の記事

認知症最前線

ユニット自慢

神学院実習生

リレーエッセイ

今月の愛の園



医師 愛の園診療所

中北和夫



認知症の最前線

認知症患者数は、2010年の時点で226万人と推定されていますが、実際のところ、診断技術が向上して、すでに350万人を越えているとも言われています。年齢別出現率を見ると、85歳以上では27%余りの人が認知症になると報告されています。今後高齢化社会へと進む日本にとっては、認知症は最も身近な病気ということになります。

認知症が病気であるとなれば、単なる物忘れとを区別しなければなりません。その違いは、認知障害があるため社会生活に支障をきたす状態になったのが認知症であり、正常に社会生活ができる状態が高齢による単なる物忘れです。老化による物忘れはヒントを与えられれば体験を思い出せますが、認知症では自分の体験は全く思い出せません。認知症は一旦発症すると、症状は徐々に進行します。

最近、いろんな認知症治療薬ができていますが、わずかの期間、症状の進行を抑えるだけで、根治できる薬は未だ開発されていません。認知症は決して治癒しない病気です。患者さんはおそらく、言葉で表わせない精神的ストレス、不安、恐怖を感じていると思います。

我々、医療・介護従事者のなすべきことは、現在の医療状況においては、認知症を治すことではなく、患者さんの不安や恐怖を最大限に取り除き、認知症患者を持つ家族を十分に援助することではないかと考えております。



桜美林大学の学生たちが、合唱寸劇「暴れん坊将軍」を披露してくれました。歌あり、殺陣あり、ダンスありの楽しい1時間でした。9/5

ユニット自慢！(10) 「3 ユニット」

3ユニットの職員は出勤するとまず入居者の皆さんお一人ずつへのご挨拶からスタートします。その時の皆さんの表情や声の調子で、心身のご様子を窺い知ることができます。時には、「あんた、昨日見えなかったけど具合悪かったんか？」と、入居者の皆さんから声をかけていただきます。

リビング中央にあるキッチン是对面型なので、食事の支度をしたり洗い物をしたりしながらいつでも入居者の皆さんのご様子が窺えます。また、お話ししながら一緒におやつ作りなどもしています。

昨年からプランターでの野菜作りに取り組んでいます。「何を植えようか」というところから皆さんと相談し、肥料や苗を一緒に買いに出掛

けています。夏にはきゅうりやミニトマト、春にはラディッシュ、サニーレタスなど、たくさん出来ました。収穫の時には両手が土まみれになりながら作業し、それを一品のおかずとして皆で食卓を囲みます。季節に応じた野菜を口にして収穫の楽しみを味わいながら、「はつもんや」と喜ばれています。今期は暑さにも強い花々に溢れています。今は秋から冬に向けて、どんな野菜を栽培するかを話し合っています。

ユニットの職員は入居者の皆さんの笑顔を大切に、関わり合いの中で「一喜一憂」する瞬間共有できるよう心掛けています。また、ご家族の皆さんにも日常のご様子をお伝えし話合せて、より良い生活をサポートしてゆきたいと願っています。



5月の収穫！さて、この次は？



左から
行森 崇
下畑朝香
田上美穂
森田泰子
田浦 望



愛の園での出会いを通して 阿部恵子 姜炯俊 成岡宏晃



姜 炯俊 成岡宏晃 阿部恵子

7/27から8/16まで、1階の入居者の皆さんと過ごしていただきました。ありがとうございました。

見知らぬ者同士が寄り添い、小さな家族が作られ、その家族が11合わされ“愛の園”は在ります。愛の園の入居者と職員の間個人的な繋がりはないかと思う時、私は人の“集まり”に不思議さを感じます。私達はどこそこに“集まる”のではなく、“集められている”と言われます。人は全てを神様に知られていますから、ましてや通りを行き交い、時間を共有する人々、更には友人や家族となるべき人なら、なお更考え合わせられていると思います。そこには“お互いに支え合いなさい”とのメッセージが込められていると思います。(阿部恵子)

私は3ユニットで実習した姜炯俊と申します。ここでの実習は私にとって世代の差と国の差を越えて心の交感できた実習でした。最初の時はなんか方言まで混ざっていて簡単な会話すら難しかったけど、過ごしている間、い

つの間にか自然にユニットの中で入居者の方と一緒に住みながら楽しんでいる自分を見つけました。実習のために来たけれど、最後は実習ではなくまるで自然にここで住んでいるような感じでした。体は離れていても3週間一緒にすごした入居者の方々を覚えながら、元気に過ごされることを祈ります。(姜炯俊)

私が今回、愛の園で実習をさせていただくに当たって、常に意識しようと努めていたことは、「目の前にいる一人の心の想いと向き合う」ということでした。それは、人生の大先輩であり、自分とは異なった歩みを重ねてきたたくさんの方々と「共にいる」ということであつたと実感しています。たくさんの方の暖かさに包まれていた今回の3週間を、私は決して忘れません。入居者の方をはじめ、職員の方々や私たちを受け入れてくださった全ての方々に心から感謝いたします。(成岡宏晃)



“人生の先輩”との穏やかな一時

「キリストの愛を以って
互いに仕える」

社会福祉法人神愛会
特別養護老人ホーム愛の園

〒649-2103
和歌山県西牟婁郡上富田町
生馬 316-56

TEL (0739)47-1234

FAX (0739)47-4329

ainosono@shinai.or.jp

ホームページもご覧ください。
Web サイト アドレス:
<http://shinai.or.jp>

リレーエッセイ(4)

「人生の先輩の言葉から」

旧愛の園で、介護未経験の私の採用面接に際して濱野前園長は、「人間が相手のこの仕事は1+1=2にならないのよ、時には3にもなれば4にもなるの。大丈夫?」と言われ記憶に残っています。仕事の向き不向きもあるからと1週間の体験勤務をしましたが、その間は仕事内容よりも入居者の皆さんとの会話がとても楽しく感じられました。それが私の介護職との出会いでした。5年弱勤務し一度退職しましたが、2月から10年振りに復職しました。

10年間のブランクは思った以上に体力や介護知識・技術の不足を感じさせ、最初の3ヶ月は焦る毎日でしたが、介護技術やユニットケアなど研修が定期的開催されており、今は落ち着いて勤務できています。

介護職員

那須啓子

ユニットでは、10人の入居者に対して5人の職員で馴染みの関係を作りながら生活のお手伝いをさせていただいています。そうした中、入居者の方から父親の教えとして、「屁理屈を言うな、自慢をいたすでないぞ、他人が嫌うぞ、目上の人に可愛がられて教えを受ける。」と聞かされました。10年前にも入居者の方から「孝行は親にするとは思うなよ。廻りまわって己が身のため。」と教えられました。人生の先輩の言葉は、なるほどと考えさせられます。これからも濱野前園長が言われた「1+1=2にはならない」という言葉を大切に、一人一人に合わせたケアによって入居者の皆さんが安心して生活していただけるよう、一步一步進んでいきたいと思っています。

次回は井戸本真紀さんをお願いします。

9～10月の愛の園

- 11(火) マリア会
- 13(木) やまびこ会
- 14(金) 岩田幼稚園児敬老訪問来園
- 16(日) 日曜礼拝
- 18(火) ひまわり会
- 19(水) 手芸サークル 歯科診療
- 20(木) やまびこ会
- 21(金) 上富田社協ボランティア来園
- 23(日) 日曜礼拝 ヨネクラ玩具来園
- 25(火) マリア会
- 27(木) やまびこ会
- 29(土) ボランティアの集い
- 30(日) 日曜礼拝 愛の園創立記念日
- 2(火) マリア会
- 4(木) やまびこ会

編集者から

若年性認知症をテーマにした映画「明日の記憶」(渡辺謙・樋口加南子 2006)のモデルとなった故越智俊二さんの奥様、越智須美子(おちすみこ)さんの講演を聞く機会がありました。

夫婦・親子間の葛藤や切迫した家計など、きれいごとでは済まない在宅介護の苦しさを赤裸々に語ってくださいました。同時に遠慮がちではありましたが、福祉専門職と介護施設に対して、「当事者と家族に真剣に向き合い寄り添ってほしい、高い専門性をもって支援してほしい、若年性認知症への理解を進めてほしい、資源・制度を充実してほしい」など、ご経験からの要望と厳しめの激励とを伺いました。

認知症介護への事業者としての社会的責任について思いを新たにできました。(A)